

遠藤周作『深い川』の「転生」について

1. 物語の構成のまとめ

一章～五章までは、(二章の説明会を除き)主要な登場人物のエピソードが語られています。以下に便宜を図って簡単に表にまとめてみます。

| | 一章 | 二章 | 三章 | 四章 | 五章 |
|---------------|--------------|-----|--------|---------------------|-------|
| 章題 | 磯辺の場合 | 説明会 | 美津子の場合 | 沼田の場合 | 木口の場合 |
| 人生の困難、 負い目 | 妻(啓子)を 喪う | | 空虚を抱える | 本当の対話ができるのは、 犬や鳥 | 復員兵 |
| 求めているもの | 妻の生まれ かわり | | 大津 | 犬や鳥への報恩 | 吊い、法要 |

メモ：ピエロ、戦後日本人の類型

六章以降は、インドを舞台に、それぞれの「人生の困難、負い目」が、どのように克服され、救済されていくか(あるいは、救済されないか)が描かれています。(六章以降の表は略)(このように物語全体を俯瞰すると)異なった出自をもつ登場人物たちは、それぞれの人生に困難を抱えているのですが、それらは全く別の事柄でありながらも、「共通性」をもって描かれているということが、いえるのではないのでしょうか。その「共通性」とは何か。

2. 考えてみたいこと

(1) 転生について

私たち読者は、人生のさまざまな局面で、はからずも、生きていくことの困難を抱えることになった登場人物たちの、その一筋縄ではいかない、しかし誰もが経験するであろう困難と向き合う姿に感動を覚えますが、とくに考えてみたいのは、物語のなかでもしばしば言及される「転生」についてです。なぜか。それは「転生」によって、人生の困難からの救済がもたらされるかのように、物語が語られており、またそれぞれの登場人物の物語に共通する主題となっていくからです。これは私たち読者の人生にも、困難と向き合うのヒントを示すのではないのでしょうか。

(2) 転生は「人生の困難、負い目」からの救済なのか?

ただ、「転生」がすぐに救済と結びつくかということ、必ずしもそうではない、ということがこの物語には織り込まれているようです。物語中、添乗員の江波は、ガンジス河での沐浴の説明で、「(略)ガンジス河の沐浴はその浄化と同時に輪廻転生からの解脱を願う行為でもあります」(180頁「六章 川のほとりの町」)と述べています。この説明だと、「転生」は救済をもたらすものではなく、むしろ解脱すべきものとなります。たとえば、インドで妻の生まれかわりを探す、磯辺の次のようなくだりは、「転生」ということの執着から解き放たれることこそが、救済であるかのように読めます。

「(略)彼は運転手に教えたあの住所に再生した妻がいると信じていなかった。だが、ホスピスで死の日を医師に告げられた末期癌の患者が、それでもなお、一縷の望みを持つよう

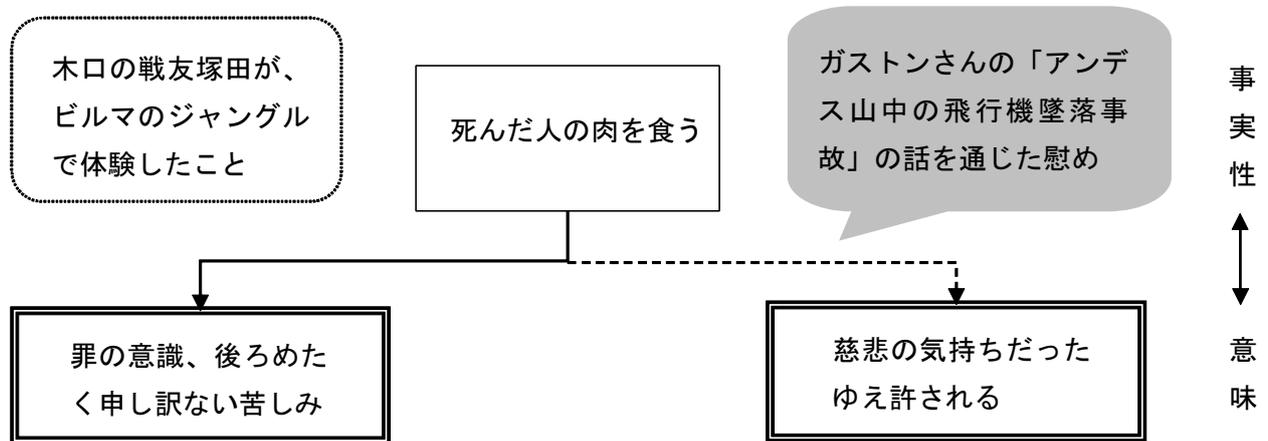
な、むなしさに彼は耐えていた。(それで諦められる)と彼は自分に言いきかせた。(それで諦めきれぬ) (300頁 「九章 河」) **メモ：美津子に近似**
果たして「転生」は救済をもたらすのか、あるいは、解脱すべきものなのか。

3. 「転生」についての考察

それでもやはりなお、「転生」は救済であると、この物語は教えていると思います。私が注目したのは、木口が美津子に自分の見た夢を語る部分です。

「転生ですか。あのね、私は讒言を言った夜、実はね、こんな夢を見たのです。今でも憶えています。夢のなかで戦友が私の前に苦しそうに現われ、その苦しい戦友をガストンさんが抱きかかえている夢です。ガストンさんと戦友とは背中あわせだと私は思いました。戦友は私を助けるため肉を食うた。肉を食うたのは怖いですが、しかしそれは慈悲の気持だったゆえ許されるとガストンさんが言うている夢です」(略)「転生とは、このことじゃないでしょうかね。」(343頁「十二章 転生」)

この部分を以下に図示します。



重要だと考えられるのは、「死んだ人の肉を食ったこと」は同じで、そのこと自体は決して変えることができない出来事なのにもかかわらず、それが、一方で罪の意識を抱かせ、もう一方では感謝の気持ちを抱かせるといった、いずれのきっかけをも持っていたものとして描かれている、ということです。(むずかしいのですが) これは「物は言いよう」といったことではなく、むしろ「死んだ人の肉を食って生きている人がいる」という事実性をこそ、浮かび上がらせているといえないでしょうか。そしてこのことは罪の意識や、感謝の気持ちといった世俗的な意味の次元を超えて、事実性として、救済をもたらす。

4. 結論

この考察から、先の「果たして「転生」は救済をもたらすのか、あるいは、解脱すべきものなのか。」を見直すと、次のようにいえるのでないでしょうか。

世俗的な、意味の次元での転生からの解脱が目指されることによって、事実性としての転生＝救済がもたらされる、と。この事実性への「転生」が教えるところは、少なくともと考えます。遠藤周作が描いた「転生」とはこのようなものではなかったでしょうか。

メモ：最後の読書における津野さんの読書技法

津野海太郎『最後の読書』における津野さんの読書技法について

5. 津野海太郎さんの読書技法と、「転生」は似た構造をもつのでないか？

たとえば、津野さんは、須賀敦子の「福祉という柵」を次のように読んでいきます。まず須賀敦子の引用します。

福祉という柵を設けて、ふつうの人間と同じように生きられないと私達の決める人を、そこに閉じ込めてしまう。そして自分は、福祉のお世話になんかならないで済む世界に、ぬくぬくと生きている。もし私が、そんな福祉の対象になる立場に置かれたとしたら、どんなにつらいだろうか。(福祉という柵)『最後の読書』304頁)

以下、便宜上、わかりやすくするために、津野さんの文章を入れ替え付番して読んでいきます。

①この文章は「福祉の対象になる」者ではなく、かれらを「ふつうの人間と同じように生きられない」と決めて、福祉の「柵」の向こうに追いやってしまいかねない者の視点から、みずからを批判するというしかたで書かれていた。通常、そうとしか私たちには読めない。(321頁)と、津野さんは書いています。

②一方で、北原怜子の『蟻の町の子供たち』は、松居桃楼という「夢見る策士」による加筆があると津野さんは勘繰ります。罪悪感を利用して、したたかに自分の新しい夢を実現しようとする手の内がすけてみえたのではないか。むしろ津野さんは、須賀敦子もこのような罪悪感によってセツルメント活動をおこなっていたのだろうか、そうともいえないのではないか、という疑問をもったといえます。

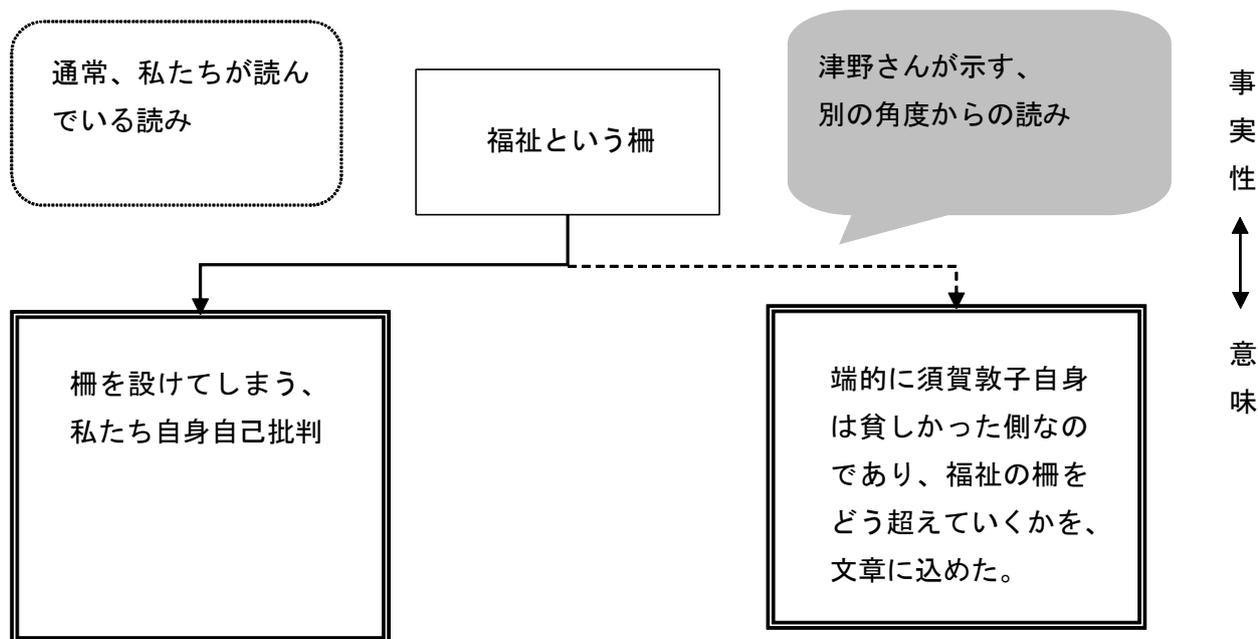
③(312頁)あそこ須賀が悩み、新しい時代のカトリック教徒としてどう生きてゆくかを真剣に考えはじめたのは、他でもない、まだ東京のいたるところにバラック集落があり、おおぜいの難民化した人々が身近にいた、そんな環境においてだった。

④(316頁)須賀敦子は政府保護留学生として、カトリック左派運動やエマウス運動の本拠地であるパリにむかった。しかし、とうとう納得できる解答を得られないままに、1960年ミラノ・コルシア書店の活動に加わり、ベッピーノと結婚する。(須賀敦子自身が貧しい家族の一員となっていた。)

⑤(321頁)そしてこう考えると、さきに引いた「福祉という柵」という文章の「もし私がそんな福祉の対象となる立場に置かれたとしたら、どんなにつらいだろうか」という一行が以前とはべつなふうに読めてくる。この文章は「福祉の対象になる」者ではなく、かれらを「ふつうの人間と同じように生きられない」と決めて、福祉の「柵」の向こうに追いやってしまいかねない者の視点から、みずからを批判するというしかたで書かれていた。通常、そうとしか私たちには読めない。

⑥カタチだけの仮定ではない、つらい記憶がまだなまなましく染みついていた、という須賀の背景を追うことで、須賀のセツルメント活動が（北原怜子＝松居桃楼によって演出された）ゴリゴリの使命感というよりは、「ためらい」や「ゆれ」や「うたがい」もすすんで受け入れる、ゆるいかたちの運動だったらしいというていどの推測はつく。としています。

以下に図示します。



福祉の柵を取り除くのではなく、そしてそこに開き直るのではなく、つねに福祉の柵はあり、そこで逡巡する他ない、という認識をうる。

文章が、ある特定の読み＝意味から解き放たれて、息を吹き返した、転生したかのように感じられはしまいか。

（326頁）そして老人と老人以前とでは、たんなる事実として、その集積の（質とまではいわずとも）量がちがう。しかも心身のおとろえに並行して、未来を想像する力も遠慮なく失われてゆくので、古い本だけでなく、新しい本までも、思わず知らず、過去に積み重なったおびただしい体験のあいだを往ったり来たり点検しながら読んでしまう。未来より過去にかたむく。そういう読み方がしだいにじっくり感じられるようになった。